

ばし

# いつかつり橋で

日本児童文学者協会・編



# いつかつり橋で

日本児童文学者協会・編——小峰書店





●新選・子どもの文学・17

●へ愛とまごころものがたり 2

●いつかつり橋で

●編 者 日本児童文学者協会

●発行者 小峰紀雄

●表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

●本文印刷 株式会社 三秀舎

●製 本 小高製本工業株式会社

●発行所 株式会社 小峰書店

東京都新宿区舟町六二一六〇

振替口座 東京六一九五五四四番

電話 〇三(三五七)三五二一

一九八六年三月一〇日 第一刷印刷

一九八六年三月二五日 第一刷発行

ISBN4-338-06117-0

©1986. Printed in Japan

●——乱丁・落丁はお取り替えます。

NDC913 22cm 131P

新選・子どもの文学・17

●愛とまごころものがたり 2

いつかつり橋で 他五編

## はじめに

人間のよろこびやかなしみを、詩や物語  
にあらわすのが文学です。すぐれた文学は、  
ただおもしろいだけでなく、私たちの心をゆ  
たかにしてくれます。

この『新選・子どもの文学』のシリー

ズ全二十四巻は、少年少女のみなさんの心  
に訴える楽しい童話、真実味のあふれる

物語、胸にひびく話を集めた本です。学校

や友だちの話、動物の話、冒険探検の話、む

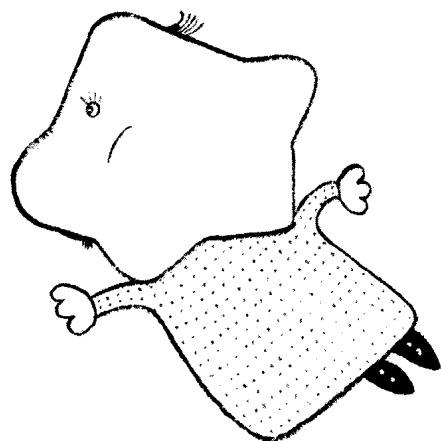
かしの話などいろいろある中の一冊がこの巻です。

現代の子どもの文学の作家たちの力を集めて作っ  
たこのシリーズを、どうか読んでみてください。

『新選・子どもの文学』編集委員会



もぐじ



ひろったりんご

おおいし

まこと

6

あばらやの星

つばい

さかえ

16

一銭だまのハゲ

すずき

みのる

34

ふたりだけの遠足

すずき

まきはる

48

いつかつり橋で

はまの

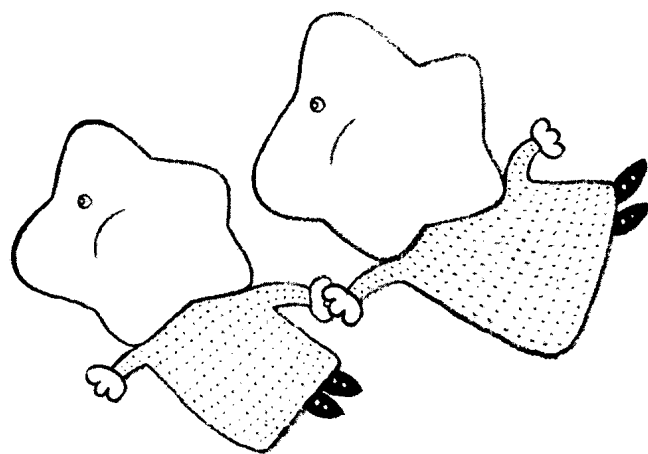
たくや

67

三少年汽車にのる

つかはらけんじろう

94



新選・子どもの文学——⑦へ愛とまごころものがたり 2へ  
いつかつり橋で

●解説

長崎源之助

●編集委員

藤田圭雄 長崎源之助 大石 真 藤田のぼる 岩崎京子

関 英雄 しかた・しん 木暮正夫 上 笙一郎

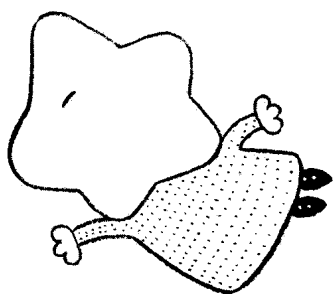
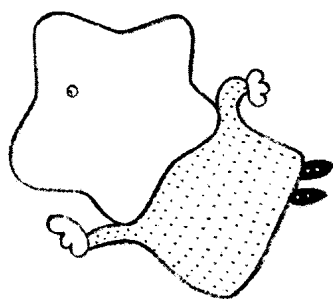
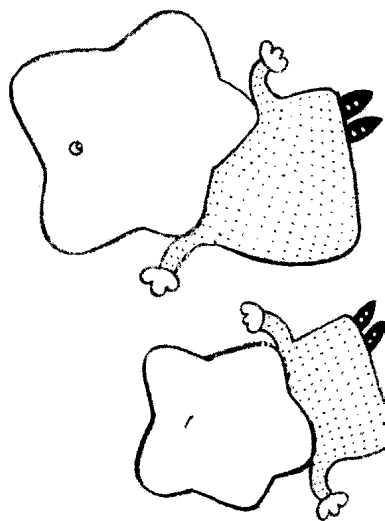
●表紙絵 ●さし絵

市川禎男 牧野鈴子

斎藤博之 間瀬直方

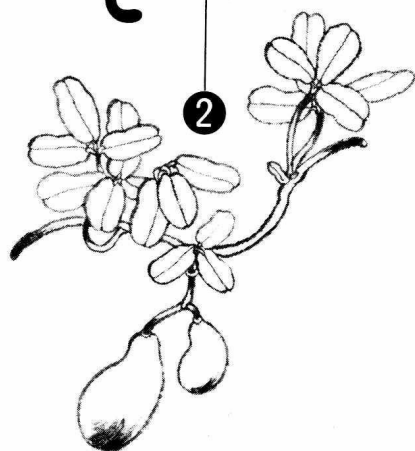
●装幀

村上 勉





●愛とまごころものがたり  
いづかつり橋はしで



# ひろったりんご

大石<sup>おおいし</sup>

真<sup>まこと</sup>

「あら、この記事<sup>きじ</sup>、タクちゃんたちのことじゃない？」

ある朝、新聞<sup>しんぶん</sup>を読んでいたママが、とつぜんいうので、ぼく、びっくりしちまつた。

だって、新聞にでるようなわるいこと（いや、いいこともあるな）したおぼえ、ぜんぜん、ぼくにはなかったんだもの。

「どんなこと書いてあるの？」

あわてて、ママのところへはしって行って、新聞をのぞきこんだら、

「ほら、このまえ、タクちゃん、知らないおばあさんから、りんごをもらってきた

でしょ。あのおばあさんが投書とうしよしたのよ、きつと。」

ママは、そういって、新聞しんぶんの記事きじを読よんでくれた。

「『先日せんじつ、マーケットで買った、りんごの大ぶくろをかかえて歩道橋ほどうきょうのかいだんをあがっていくと、とつぜん、ふくろがやぶけて、かいだんからりんごがころがりおちてしまいました。まわりに、おとなの人たちもいましたが、みんな、気のどくそうにこちらを見るだけで、だれひとりひろってくれようとはしません。

すると、そこへとおりかかった小学三、四年生の子どもたちが、あつというまにひろって、わたしのところにとどけてくれました。

わたしは、子どもたちのしんせつに、一日じゅう、しあわせなおもいをかみしめました。』

ね、これ、タクちゃんたちのことでしょう。」

「うん、そうらしいね。でも、『かみしめる』って、どういう意味いみ？」

「よく、かむということよ。よくかむと、ほんとうのあじがわかるでしょう。」

「じゃあ、これを書いたおばあさん、よっぽど、うれしかったんだね。」

「そうよ。だから、新聞に投書したのよ。」

ママにいわれて、ぼく、すっかり、うれしくなっちゃった。

それで、その記事を、もういちど、じぶんで読むと、

「学校へもってって、今野くんや、原田くんに、見せてやるんだ。それから、先生にも。」

ぼくは、新聞をママからもらって、ランドセルにいれると、学校にむかってあるきだした。

でも、あるきながら、ぼくは、だんだん、へんな気持ちになってきた。

ぼくたち、あるとき、ほんとうにしんせつな気持ちから、りんごをひろったのだろうか。

なんだか、そうでもなさそうなんだ。

ぼくが、今野くんや、原田くんと、歩道橋のかいだんをあがろうとすると、上の



ほうから、ごろんごろん、りんごがおちてきたので、

「おっ、こいつは、すげえや。」

といって、みんな、むちゅうで、そのりんごをひろいあげたんだ。

りんごひろい競争きょうそうみたいで、とつても、おもしろかったのさ。

そして、気がついてみたら、かいだんの上のほうに、こまった顔をしておばあさんがたっていた。それで、ひろったりんごを、おばあさんにかえしてあげただけなんだ。

だから、そのとき、ぼくたち、ちつともよいことをしたなんて、おもってもいなかったんだ。

それなのに、あのおばあさん、ぼくたちのことを、とつても、よろこんでくれて、ひとつずつ、りんごをくれたし、それに、新聞しんぶんにまで、投書とうしよしたんだ。

あんな、ちよつとしたことでも、あのおばあさんにとっては、ものすごく、うれしかったんだ。

でも、人をよろこばすのって、いい気持ちきもちだなんて、ぼくは、つくづくおもった。  
いや、ぼくだけじゃない。新聞しんぶんを見せたら、今野いまのくんも、原田はらだくんも、もう、す  
っかり、よろこんじゃったのさ。

きつと、そのせいもあるとおもうんだ。

それから、二、三日して、ぼくたちが公園こうえんにあそびにいこうとしたら、知らない  
おばあさんが、大きなだんボールのはこを両手りょうてでかかえて、おもそうに、よちよち  
あるいていくんだ。それを見て、

「ぼくたちで、はこんであげようじゃないか。」

って、今野くんがいうので、ぼくたちも、すぐ、さんせいしたんだ。

「おばあさん、ぼくたちで、はこんであげる。」

というと、おばあさんは、口のなかで、なにかもがいて、うれしそうに、う  
なずいたっけ。

そこで、ぼくたち、おみこしみたいにな、だんボールのはこをかついで、

「わっしょい、わっしょい。」

どンドン、おばあさんのさきを、かけていったんだ。

そのうち、十字路じゅうじろにきたので、どちらへいくのかとおもって、うしろをふりかえると、おばあさんが見えないのさ。

「あれ、どこへいつちまったんだろう……。」「

ぼくたち、青くなっちまった。

あわてて、あちこちさがしまわったけど、どこにもいないし、いくらまってもこないんだ。

「へんだなあ……。」「

ぼくたち、すっかり、しんぱいになっちまった。

しかたがないので、そこから、ずいぶんさきの交番こうばんまではこんでいって、わけをはなしたら、そこのおまわりさん、ぶすつとした顔をして、だんボールのはこをひらいたんだ。

そうしたら、はこのなかには、ぼろぎれや、あきかんや、やぶれたスリッパなんかが、ぎっしり、つめこまれているのさ。

「なんだい、こりや……。」

おまわりさんは、顔をしかめて、

「どこかのごみおき場<sup>ば</sup>へはこんでいこうとおもったら、ちようど、きみたちが、はこんでくれたんで、おばあさん、そのまま、かえっちまったんだよ。」

そういうんだ。

それをきいて、ぼくたち、おもわず顔を見あわせちまった。

なるほど、それなら、おばあさんが、いっしよに、ついていくこともないものね。でも、ずいぶんちゃっかりしたおばあさんだよ。

「今<sup>いまの</sup>野、おまえが、よけいなことをいうから、ひどいめにあっちまったじゃないか。」

ぼくたちは、ぶつぶついいながら、また、だんボールのはをかっいで、とおい

ごみおき場<sup>ば</sup>まではこんでいったんだ。

それから、まもなく、学校の運動会<sup>うんどうかい</sup>がやってきた。

この運動会では、ぼくたちは、いつも、見物<sup>けんぶつ</sup>にきたおとなの人たちといっしよに、フォークダンスをおどることになっているんだ。

はずむようなリズムにのって、ぼくたちは、つぎつぎと、いろんなおとなの人たちとおどりまわった。

そのうち、ぼくのまえに、しらがのおばあさんがきた。

ぼくは、おもわず、目を大きくあけちゃった。

だって、あの、おばあさんなんだ。

ぼくたちが、りんごをひろってあげた、あの、おばあさん！

おばあさんは、ぼくを見て、とてもおどろいたようだったが、それから、にっこりわらった。